

令和3年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：令和3年1月19日（火） 9:00～9:50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記の2つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2項目の全てに記入またはマークする。
 - ・受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
 - ・氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

— 開始後 —

1. 問題は2ページから22ページまでの各ページに印刷されており、第1問～第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3

と表示のある問いに対して2と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号3の解答欄②をマークする。

〈例〉

解答 番号	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際はHBの鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退出はできない。

受験番号

--	--	--	--	--	--

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

私たちのからだの調子には、多少なりとも「波」がある。いわゆる「調子の波」だが、この波の谷間は、スランプなどと呼ばれ、だれもが大なり小なり、俗にいう「不調」を自覚するものだ。ここではこの「不調」を、とくに「睡眠」の問題と結びつけて考えてみたいと思う。眠りが悪い時は、機嫌も悪く、体調もよくない。自分の眠りのリズムが、いま、どんな状態にあるか、この機会にあらためて振り返ってみよう。

近頃、眠りがよくない。まず寝つきが悪い。夜半に夢ばかり見る。朝早く目がさめてしまう。午前中はとくにだるく、日中はすぐ疲れる。朝の食欲はゼロ。胃はもたれ、兎のウンコか、ビチビチ便。肩こり、腰痛はもう慢性。低血圧で、すぐ立ちくらむ。遅刻で、駅の階段をかけ上ると、ドキドキは止まらない。原因不明の微熱も続く。

不調の訴えは、もちろんこれだけではない。やがて、こころのほうへ移っていく。

毎日毎日が「億劫」で、ヤル気が起こらない。また、なにをやってもつまらない。夜は、少し持ち直すが、いろいろ取り越し苦労が出てくると、もうきりが無い。からだのことが心配になる。不治の病ではないかと思う。おのれの能力から、将来の生活まで思い思う。自分の落ち度ばかりが気になる。ひと言多かつたのでは……、ガスを消し忘れたのでは……、などなど。こんなことでは駄目だ、としないでアセリが出てきて、いつの間にか、自分で自分をムチ打っている。

不調の主な訴えは、だいたい以上のようなものである。このなかから、人により時により、違った「順列組合せ」ができてくるので、一般に「(甲)」などと呼ばれているが、ここで、もう一度、肉体症状のほうを振り返ってみると、そこには、ある共通した眠りと目ざめの波型が浮かび上がってくる。(a)、それは「眠りも目ざめも悪い」という、ひとつの簡単な図式である。これを日中だけに限ると、それは一種の「慢性覚醒不全」ということになる。とくに午前中がひどい。《1》

ふつう、目ざめは、目の感覚から始まり、五体の筋肉を経て胃腸、すなわち胃袋と糞袋(大腸)の筋肉に及ぶといわれる。目ざめに「空腹とウンコ」が続く形に代わって、ここでは、目だけさめて、からだはまだ半分眠ったまま、という状態が姿を現わす。いま、眠りと目ざめの波型を、仮にグラフの曲線で表わすと、そこには二つの異常が出てくる。そのひとつは「イソウのズレ」、もうひとつ

は「振幅の減弱」だが、この両者が同伴しているような時は、不調も深刻だ。

学校が休みになると、とたんに夜ふかし朝寝の悪い癖が出て、生活の時間帯が、どんどん後ろにズレ、どうかすると昼夜逆転しそうになる。そして実際、受験の前など、この逆転を経験した、という話もよく耳にする。かれらは、しかし学校が始まると、そうはしておれず、必死になって、そのズレを取り戻そうとがんばるのだが、それがうまくいかない時は、いわゆる「朝が弱く夜に強い」、俗にいう「夜行族」のレッテルを自分自身に貼り付けてしまう。

(b) 近年、ジェット機の発達で時差ボケの研究が進んでいるが、なかでもドイツのマックス・プランク研究所の「睡眠環境」と呼ばれる、特別室での実験は、まことにみごとな結果を見せてくれる。それは、時間のわからない部屋で、長期間、好きなように寝起きをさせると、ほとんど例外なく二四時間より、一時間前後も長い「二五時間」という、おそろしく根の深い周期が顔を出し、そのため毎日毎日、時間がズレ、約二週間で昼夜の逆転が起こる、というものである。そこでは、だから本人も気付かぬまま、この「夜ふかし朝寝」を地で行く生活を送っていたことになるわけだ。《2》

ここから、私たちは、さきの受験生活が、じつは知らぬ間に行なわれた、睡眠環境での実験そのものであり、さらに、こうした「ズレ」の素質とは、本来だれもが持っている根の深いものという、まことにのびきならぬ事実まで思い知らされることになるのである。

↑
いったい、この二五時間というリズムはなにものか……？

私たちは、かねてから、この摩訶不思議なリズムが、じつは地球生命の故郷である大海原のうねり——潮汐リズム——と、ある深いきずまで結ばれているのではないか、とひそかに思い続けてきたものだ。もちろん、これはたんなる幻想とか、語呂合せの類ではない。この地球の生物の自然誌を、古生代の昔にまで遡^{さかのぼ}っていくうちに、いつしか生まれ出た、なにか生命的な「想い」のようなものである。

海のくらしが、潮の満ち干きに左右されることは、海辺の漁師たちの日常を見るまでもなく明らかであろう。この海面の果てしない「昇り降り」は、地球の自転による月の引力の、周期的な増減がひき起こすもので、一日に二度、いわゆる「朝な夕な」に見られるところから「潮汐リズム」と呼ばれている。その周期は、しかし、一日すなわち「昼夜リズム」の二四時間よりも五〇分ずつ長い二四・

八時間である。これは、⁽⁴⁾キジユンとなる月そのものが、地球の周りを巡るからで、太陽をキジユンとした時より、とうぜんそれだけ長くかかることを意味するものだが、毎日毎日、干潮と満潮が、月の出・月の入りと共に確実にズレていく、この世界のなかで海辺の生物たちは生を営んでいる。

さて、海辺の生活を左右するのは、はたして、この潮汐リズムだけなのだろうか。かれらは磯^{いそ}に近づくほど、太陽光線の影響を受けやすくなる。ここでは、潮の満ち干きだけでなく、日光の明暗いいかえれば一日二四時間を周期とする「昼夜リズム」の支配も、しだいに受けるようになってくるのである。《3》

かのムツゴロウは、実験によれば、故郷有明海の干潮の時間帯が、朝夕の未明・⁽⁵⁾ハクボと重なった、つまり夜間満潮時に、もつとも多く巣穴からはい出してくるといふ。このデータは、かれらの肉体が、潮の干満だけでなく、光の明暗にも同時に感応している、いいかえれば「太陰日」と「太陽日」の、二種類の日リズムの支配下に置かれていることを、⁽⁶⁾ニヨジツに物語るものといえよう。

この陰・陽の両リズムは、遠い祖先から、代々にわたって受け継がれ、もはや、生まれながらの、いわゆる「体内時計」となつて、めいめいの時を自分のペースで刻み続けているものである。かれらの活動が、きつちり二週おきに活発となるのは、いつてみれば、振動数の少しズレた、二種の音叉^{おんさ}が「唸り^{うなり}」を発するのと同じであることが以上のことからうかがわれるだろう。

私たちの遠い祖先は、古生代の終わりに、それまでの長い波打際の生活を捨て、上陸を敢行したといわれる。この一億年に及ぶ上陸のドラマが受胎一カ月後の一週間に、子宮の羽二重の褥^{しとね}を、いわば檜^{ひのき}舞台として演じられる。胎児のからだはその間、小豆からソラ豆大に成長するが、その時、首すじに刻み込まれた鰓^{えら}の形象は、耳の穴を残して消え、その魚類を思わせる顔は、またたく間に、両生、爬虫類のそれを経て、哺乳類獅子頭^{ししづ}の相貌にまで、劇的な変身を遂げるのである。

胎児は、こうして自分のからだを張って、遠い祖先の上陸の日々を、夢幻のごとく、再現させるが、どの動物も、胎児の時代にひとしく演じて見せる、この上陸劇は、かれらの小さなからだの、どこか奥深くに、すでに「海辺のリズム」が込められていたことを、私たちに想像させずにはおかない。それは、時に述べたムツゴロウの、例の二種類の体内時計と同類のものであることはいままでもない。

さて、この二つの時計は、上陸以後その⁽⁷⁾キンコウが破られてくる。しだいに遠のく故郷の潮騒に代わって、にわかには照りつける灼^{しやく}

熱の日射しが、両者の勢力に、ゆるやかな逆転の現象を起こさせることになる。ここでは、古い「潮汐時計」の上に、新しい「昼夜時計」が重なり、陸地に定着を終えた今日では、もはや、後者が前者をすっかり覆いつくしてしまう。これが、一日二四時間を単位とする現代の形である。

さて、脊椎動物は、こうして上陸と共に、太陽のリズムに生活の主導権を奪われることになったが、ここで私たちは、さらに新しい生活のリズムがつけ加わるのを見逃してはならない。《4》

それは、水の生活では見られなかった、気象の変化——寒暑そして乾湿——のもたらしたもので、一年の一定の期間を「休眠」という形で過ごすものである。まだ半分しか上陸していない両生類では、陸地の乾燥と低温から身を守るために、そして、上陸は済ませたが、まだ変温動物のままの爬虫類では、陸地での厳しい寒気をやり過ごすために、それぞれ、そうした活動を一時的に休止する。いわゆる冬眠がこれである。

この年周期の休眠現象は、やがて体温の調節によって恒温化した哺乳類では、しだいに、その姿を消していく。ここでは、温かい血液を全身にまわらせて、冬場も休みなく働くのだが、X。たとえばクマは、この時期をうつらうつらと微睡まどろみながら巣穴のなかで過ごす。つづいてやれば目をさまし、止めればまた眠る。ここでは、眠りも目ざめも「平らな波」となっているのである。

はじめに私たちは、眠りの「リズムのズレ」と肩を並べて「振幅の減弱」が不調の肉体に見られることを述べたが、こうしてみると、それはまさにこの「クマの冬眠」を私たちに連想させずにはおかない。もちろん、これが夏場のこともあり、また季節の変わり目のこともあり、さらに、こうした季節とは無関係のこともあるが、(c) 毎年ある一定の季節に「渡り鳥」のごとく訪れる、そうした多数の例を目のあたりにする時、私たちはかれらの肉体原形質に染みついた、この「休眠」という、上陸当初の「(乙)」を思わずにはいられない。それは、いま述べた磯辺の時代のそれと共に、ここでもまた、その顔をのぞかせようとすることあることにうごめき続けているのだ。《5》

以上のように見てくると、どうやら、私たちの日常生活は「光の明暗」だけではなく、それは「潮の干満」から「四季の交代」に

至る、いわば宇宙的な要素と、きわめて深く関わっているように思われてくる。月にまつわりつかれて、太陽の周りを“自転”しながら“公転”する、^Bこの地球の面の色とりどりの周期性が、あるいは、私たちの肉体をかりて現われたものではないか、と思われてくるのである。

(出典 三木成夫『内臓とところ』より)
*本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(配点 各2点)

(ア) イソウ	① 居	② 位	③ 委	④ 意	⑤ 囲
(イ) キジユン	① 準	② 順	③ 純	④ 循	⑤ 巡
(ウ) ハクボ	① 簿	② 模	③ 墓	④ 暮	⑤ 募
(エ) ニヨジツ	① 質	② 日	③ 実	④ 執	⑤ 失
(オ) キンコウ	① 衡	② 公	③ 交	④ 硬	⑤ 高

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

(配点 各2点)

- ① もちろん ② ところで ③ たとえば ④ なぜなら ⑤ しかし

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）、（乙）

（配点 各4点）

（甲）

- ① 八方美人
- ② 言語道断
- ③ 不定愁訴しゅうすい
- ④ 支離滅裂
- ⑤ 疑心暗鬼

（乙）

- ① 自己主張
- ② 生命記憶
- ③ 昼夜リズム
- ④ リズムのズレ
- ⑤ 時間感覚

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① その典型的な場合をあげよう
- ② それは状況次第で変化する
- ③ それには生活のリズムが作用する
- ④ ここでもやはり例外はある
- ⑤ その場合には消耗が激しくなる

問五 次の一文は、本文中の《1》《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

(配点 5点)

だれもが時に思い描く『冬眠の欲望』とは、こうしてみれば、脊椎動物の自然誌に深く根ざすほどのものであることがうかがわれる。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問六 傍線部A「いったい、この二五時間というリズムはなにか」とあるが、この答えとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

(配点 5点)

- ① 地球生命の故郷である大海原から、陸上に生活の場を移した動物たちが、後に浜辺において獲得していくことになった海辺のリズム。
- ② 地球生命の故郷である海から、よりよい生存環境をもとめて上陸することで、陸上で生活することになった動物が獲得した昼夜のリズム。
- ③ 陸上で生活する動物がもつ生活リズムと、海中で生活する動物がもつリズムの、振動数が少しずれた二種類の音叉の唸りのようなリズム。
- ④ もともと地球生命の故郷である海で暮らしていた動物が、陸上で生活することになっても、その奥深くに刻まれている海辺のリズム。
- ⑤ 一億年におよぶ上陸のドラマを、受胎一か月後の一週間でなしとげる胎児が、母親の子宮の内部ですっと聞き続ける劇的な変身のリズム。

問七 傍線部B「この地球の面の色とりどりの周期性が、あるいは、私たちの肉体をかりて現われたものではないか」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 14

(配点 6点)

- ① 地球における様々な周期的環境の変化に由来する、光の明暗や四季の交代、潮の干満が、われわれの身体に悪影響をもたらしていること。
- ② 太陽の周りを自転しながら公転するという地球の周期性によって初めて、海からの上陸という進化が生じ、今のわれわれの肉体になったということ。
- ③ 睡眠障害による体調不良、精神の不調など、われわれの日常生活における調子の良し悪しなどが、様々な地球の周期性のもとにあるということ。
- ④ われわれに体調や精神の不調をもたらす、眠りのリズムのずれは、人間が「海辺のリズム」を捨てて、上陸したことで生じているということ。
- ⑤ 海から陸に上がる際に、体温の調整によって恒温化したわれわれのような哺乳類は、地球の周期性の影響をうけているということ。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15

(配点 6点)

- ① われわれの体の調子には波があり、眠りがよくないという体調不良の自覚はやがてこのころの不調にも移ってゆくが、体調不良にはある共通した眠りと目覚めの波型がある。
- ② 眠りと目覚めの異常には二つの要因があるが、このことはドイツのマックス・プランク研究所の睡眠壕の実験によって初めて確かめられた。
- ③ 地球生命の故郷である大海原のうねりである潮汐リズムと呼ばれる周期現象は、月ではなく太陽の影響を大きく受けて生じる現象である。
- ④ 人類の遠い祖先は、地球生命の故郷である大海原から古生代の終わりに上陸を敢行し、その際に太陽のリズムに支配されるようになった。
- ⑤ 睡眠障害などの眠りの不調は、リズムのズレと振幅の減弱という二つの要因によるものだが、これらを解消するものが冬眠である。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

小説家が、いくつかの小篇を集めて短篇集を編むことがある。小説でなくても、方々に書いたエッセイなどをまとめて、本にして出版するということもよく行なわれる。

こういう編纂ものではおもしろいことがある。ひとつひとつの文章や作品は、それほどとくに秀れているわけではないのに、まとめられると、見違えるようになりっぱになる場合である。そうかと思うと、単独に読んだときは、目を見張る思いをしたものが、まとめられて本の一部となったのを読み返してみると、さっぱり感心しない、ということもある。

X、ということばを思い出す。

独立していた表現が、より大きな全体の一部となると、性格が変わる。見え方も違ってくる。前後にどういうものが並んでいるかによっても感じが大きく変わる。構成部分が同じなら、どのように並べようと、大差はない、などと考える人には、編纂本を作る資格はない。

上手に編集すれば、部分の総和よりはるかにおもしろい全体の効果が出るし、各部分もそれぞれ単独の表現だったときに比べて数等見栄えがする。そういう秘密は、ごく古い時代にすでに発見されていたに違いない。

わが国で言えば、『源氏物語』、『源氏物語』、『源氏物語』、『源氏物語』、『源氏物語』、『源氏物語』、『源氏物語』などは、いわゆる「額縁物語」で、いくつかの短篇の物語をつなぎの額縁に入れて並べ、長大篇にしている。

この場合、ひとつひとつの「はなし」が作者の創作である必要はない。創作のこともあるが、流布している話を借りても一向に差支えない。作者の腕前はむしろ、何をどう配列で並べるかというところにかかっていたと思われる。創造的才能はむしろ編集に注がれた。《1》

いくら個々の物語がよくできていても、それを並べたものが読者の退屈するようなものであったら、長篇物語は「トロウに終わってしまう。こう考えてくると、額縁物語の技法は近代における雑誌編集にきわめてよく似ていることに気付くはずである。

編集者は自分では原稿を書かない。《2》書いてもよいが、編集者は書けるかどうかで評価されるのではない。他人の書いたものを

いかにまとめるか、また、そのために、だれに何を書かせるか、ということの創造性に命をかける。

原稿を書くのを第一次的創造とするならば、原稿を新しい、より大きな全体にまとめ上げるのを第二次的創造と呼ぶことができる。各パートの楽器を奏するのを一次的とするならば、シンフォニーをつくり上げる指揮者の活動は二次的である。二次的活動が一次的活動に比べて劣るものでないことは、プロ野球の監督から、ファッションのデザイナー、映画、テレビのディレクターの役割を見てもはっきりしている。

第二次的創造の価値が認められるのは、ある程度、成熟した社会を前提とする。もし、そうだとすると、『源氏物語』や『デカメロン』の時代を古いと言って軽くあしらうことはできなくなる。

第一次的創造はクリエイションである。これを加工して新しい価値にシヨウカさせるのは、メタ・クリエイションである。思考についても、この創造とメタ・創造の次元が存在する。*カクテル式の論文は、メタ・創造によるもので、物語で言えば、『デカメロン』『源氏物語』式ということになる。

思考における思いつき、着想は、第一次的なものである。これだけで独立して意味をもつこともある。そういう場合はへたによけいなものを混じえたりしない方がよい。(a)、単独ではさほど力をもっていないようないくつかの着想があるとす。そのままにしておけば、たんなる思いつきがいくつか散乱しているに過ぎない。《3》

それに対して、自分の着想でなくてもよい。おもしろいと思つて注意して集めた知識、考えがいくつかあるとする。これをそのままノートに眠らせておくならば、いくら多くのことを知つていても、その人はただのもの知りでしかない。

『知のエディターシップ』、言いかえると、頭の中のカクテルを作るには、自分自身がどれくらい独創的であるかはさして問題ではない。《4》

方々へ書いたものを集めて本にし、短篇小説をまとめて短篇集をつくりあげることとはごく普通に行なわれているのに、既存の知識を編集によつて、新しい、それまでとはまったく違った価値のあるものにする『知のエディターシップ』が技法としても、充分自覚されていないのは不思議である。《5》

いまかりに、ABCDEという五つの問題があるとすると、それぞれはすでに一応、認められた考えである。

- a ECDA Bとすれば、また別の見え方をするであろう。
- b これを集大成するには、ただ、それらをくつつければよいのではない。
- c これをそのままにしておけば五つが並存するにとどまる。
- d ABCDEの順ではまるでおもしろくないことが、EDCBAとしたら、一変しておもしろくなるということがある。
- e どういう順序にするか。それがまず問題である。

もつともよき順序に並んだときにもつとも大きな意味を生み出す。

「詩とは、もつともよき語をもつともよき順序に置いたものである」

とのべた詩人がある。詩もことばのエディタシップによってできることになる。

次はある有名な詩人学者が洩らした創造の方法である。なにか考える。創り出そうとする。そして頭に浮んでくることを片端から、ひとつひとつカードに書きとつて行く。カードがたくさんできたら、これをカルタのように並べる。そして、おもしろそうな順にとつて行く。

こうして順序ができる。それを見直す。おもしろくないようだったら、また、カルタ取りをしなおす。気に入る順列ができるまで何回でもこれをくりかえす。いよいよ、これでよしとなったら、カードを綴じ合わせる。あるいは、その順序にノリで大きな台紙に貼つてしまう。

これが、着想のエディタシップである。人を酔わせる力をもった、おもしろいと思われる表現はこうして生れる、というのである。このようにはつきりしたやり方で組み合わせを考えることはまれであるにしても、多くの人は頭の中で似たことをしていないとは言えない。おいしいカクテルをこしらえるには、絶妙なコンビネーションをつくる感覚が求められる。料理にしても同じであろう。

一般的に言えば、ありきたりのもの同士を結び合わせても、新しいものになりにくい。一見、とうていいっしょにできないような異

質な考えを結合させると、奇想天外な考えになることがある。

鬼面人をおどろかすような考えを次々生み出す人の頭は、知のエディタースhipが活発であることが多い。

詩歌などの創作は個性の表現であると、一般には考えられている。二十世紀になってそれに対して、異論を提出したのが、T・S・エリオットである。

エリオットは「伝統と個人の才能」で言う。詩人はつねに、自己をより価値のあるものに服従させなくてはならない。芸術の発達は不断の自己犠牲であり、不断の個性の消滅である。芸術とはこの脱個性化の過程にほかならない。

そういうことをのべたあとで、エリオットは有名なアナロジをもち出す。

「詩の創造に際して起るのは、酸素と二酸化硫黄（亜硫酸ガス）とのあるところへ、プラチナのフィラメントを入れたときに起る化学反応に似ている」、というのである。後年、この化学的知識は正確でないと言われたけれども、それはともかく、これは触媒反応といわれるものである。

どこに*アナロジが成立するかというと、触媒材であるプラチナが、化合の前後で、まったく増減、変化がないというのが、詩人の個性のはたす役割に通ずるものがある、とエリオットは考えた。

詩人は Y、という常識に対して、自分を出してはいけない、とした。個性を脱却しなくてはならないというのである。それでは、個性の役割はどうなるのか。そこで、触媒の考えが ⁽⁷⁾エンヨウされる。

酸素と亜硫酸ガスをいっしょにしただけでは化合はおこらない。そこへプラチナを入れると、化学反応がおこる。ところが、その結果の化合物の中にはプラチナは入っていない。プラチナは完全に中立的に、化合に立ち会い、化合をおこしただけである。

詩人の個性もこのプラチナのごとくあるべきで、それ自体を表現するのではない。その個性が立ち会わなければ決して化合しないようなものを、化合させるところで、「個性的」でありうる。

これは、それまでの芸術的創造の考えに一石を投ずることになり、エリオットの「インパーソナル・セオリー」（没個性説）と呼ばれて有名になった。

欧米では、この考え方は斬新であったけれども、われわれの国の文芸では、さして珍しいものではない。

もともと、わが国の詩歌は、主観の生の表出を嫌い、象徴的に、あるいは、比喩的に心理を表出する方法を洗練させてきた。その端的な例が俳句である。

俳句では、主観は、花鳥風月に仮託されて、間接にしかあらわれない。自然事象の結合は、俳人の主観の介在によってのみ行なわれるけれども、主観がぎらぎら表面に出ているような作品は格が低くなる。主観が積極的に作用しているのは、小さく個性的な作品を生み出す。

真にすぐれた句を生むのは、俳人の主観がいわば、受動的に働いて、あらわれるさまざまな素材が、自然に結び合うのを許す場を提供するときである。一見して、没個性的に見えるであろうこういう作品においてこそ、大きな個性が生かされる、と考える。

似たことは、すでにのべたエディターシップにおいても見られる。編集の機能を、表現する筆者と、受容する読者との手をつながせることであるとするならば、エディターシップは自分の個性や才能を縦横に發揮してケンランたる誌面をつくり出すことにあるのではない。(b)、自分の好みなどを殺して、執筆者と読者との化合が成立するのに必要な媒介者として中立的に機能する。

第二次的創造というのは、Zのことになる。

俳句とエディターシップが思いのほかに近い関係にあることは興味ぶかい。それが、また、欧米が、ようやく二十世紀になって発見した、詩における没個性説と酷似しているのもおもしろい。

〈注〉カクテル式の論文……カクテルとは蒸留酒をベースに果汁などを加えた飲み物であるが、いろいろなものが混じり合ったものとの意味もある。ここでは自説だけでなく、それまでの諸説を認めて自説と調和折衷させた論文のこと。

アナロジー……類推

(出典 外山滋比古『思考の整理学』より)
*本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は(ア)

(イ) 17、(ウ) 18

(配点 各2点)

(ア) トロウ

- ① トシ中心部の再開発が進む。
- ② 彼は専門学校のセイトだ。
- ③ 解決策が見つからずトホウにくれる。
- ④ 今までの思いをトロする。
- ⑤ 彼女のイトがよくわからない。

(イ) ショウウカ

- ① ショウヒ活動が低迷している。
- ② 偉人のショウゾウ画が飾られている。
- ③ 二国間のコウシヨウが妥結した。
- ④ 一票の格差についてソシヨウが起こる。
- ⑤ 赤道付近ではジヨウシヨウ気流が起こる。

(ウ) エンヨウ

- ① 人権をヨウゴする活動に参加する。
- ② 読後に本のヨウテンをまとめた。
- ③ ショヨウでこちらに参りました。
- ④ 声にヨクヨウをつけて朗読する。
- ⑤ 徳目としてのチュウヨウを身につける。

問二 本文中の（ a ）、（ b ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ） 、（ b ）

（配点 各2点）

- ① むしろ
- ② だから
- ③ そして
- ④ ところが
- ⑤ なぜなら

問三 空欄

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 個々の部分は全体のために
- ② 部分は全体を表象しない
- ③ 全体とは部分の統一である
- ④ 部分の総和が全体となる
- ⑤ 全体は部分の総和にあらず

問四 傍線部A「流布している話を借りても一向に差支えない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から

一つ選べ。解答番号は 22

(配点 4点)

- ① ひとつひとつの話を、単独で読んだときには目を見張る思いをしたとしても、まとめられて本の一部になるとさっぱり感心しないことが多いから。
- ② 額縁物語においては、作者の腕前は、ひとつひとつの「はなし」をどういう配列で並べるかということにかかっており、創造的才能は編集に注がれたから。
- ③ 上手に編集すれば、各部分も単独の表現であったときに比べて数等見栄えがするが、創作したものだけでは配列の妙を発揮することが難しいから。
- ④ 作者が創作した話よりも、古代から流布してきた話の方が、上手に編集することによって、はるかにおもしろい全体の効果を出すことができるから。
- ⑤ いくら個々の物語がよくできていても、それを並べたものが読者の退屈するようなものであってはならないため、より面白い物語が使用されるから。

問五 傍線部B「『源氏物語』や『テカメロン』の時代を古いと言って軽くあしらうことはできなくなる」とあるが、この理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 23

(配点 4点)

- ① ひとつひとつの部分をも、より大きな全体にまとめあげる第二次的創造の価値が認められるのは、社会がある程度成熟していることが必要であるため、『源氏物語』や『テカメロン』の時代も、成熟した社会であったことが伺えるから。
- ② 原稿を書く第一次的創造に対して、原稿を新しい、より大きな全体にまとめあげる第二次的創造が劣るものではなく、『源氏物語』や『テカメロン』は、ひとつひとつの部分を超えて全体をまとめあげる第二次的創造の成果であるから。
- ③ 近代のような編集者などがいない古い時代につくられたとはいえ、『源氏物語』や『テカメロン』には、いくつかの短編をどのように並べるかに作者の才能が発揮されており、その内容は現代に通じるものがあるから。
- ④ 『テカメロン』や『源氏物語』は、メタ・創造であり、第一次的創造であるクリエイションを加工して、新たな価値を生み出しているものであるから。
- ⑤ 『源氏物語』や『テカメロン』が創造された時代は、現代と同じように、ひとつひとつの話をいかに全体としてまとめるのかという第一次的創造に価値が置かれていた可能性があるから。

問六 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 24

(配点 5点)

もっている知識をいかなる組み合わせで、どのような順序に並べるかが緊要事となるのである。

- ① 《1》
- ② 《2》
- ③ 《3》
- ④ 《4》
- ⑤ 《5》

問七 本文 の中の a と e の文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 25

(配点 5点)

- ① a—e—d—b—c
- ② b—c—a—e—d
- ③ c—b—e—d—a
- ④ c—a—b—d—e
- ⑤ d—a—c—b—e

問八 空欄 Y

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

26

(配点 6点)

- ① 芸術の発達のために不断の自己犠牲を貫くべきである
- ② より価値のあるものに、自己を服従させなくてはならない
- ③ 自分の感情を詩にするのだ、個性を表現するのである
- ④ プラチナの如く、個性それ自体を表現してはならない
- ⑤ 創作をするのではなく、言葉の並び替えに力を注ぐべきなのだ

問九 空欄 Z

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

27

(配点 6点)

- ① 主体的創造
- ② 俳句的創造
- ③ 間接的創造
- ④ 触媒的創造
- ⑤ 没個性的創造

問十 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

28

(配点 6点)

- ① 思想における思いつき、着想は、第一次的なものであり、それぞれ独立して意味をもつことはないから、それを散乱させていくのではなく、頭の中でまとまったものにするのが大切である。
- ② 短編小説をまとめて短編集をつくりあげることができれば、“知のエディタースhip”の技法を充分に活かして、既存の知識をまったく違う価値のあるものにできる。
- ③ ある有名な詩人学者が洩らした創造の方法は、着想のエディタースhipであるが、多くの人の頭の中では、似たようなことはなかなかできないため、奇想天外な考えは浮かばない。
- ④ 詩人の個性は触媒材であるプラチナのごとくあるべきであり、個性自体を詩作の中で表現するのではないため、出来上がった作品は、個性的なものであるとはいえないことが多い。
- ⑤ 俳句では、主観は、間接にしかあらわれず、自然現象を俳人の介在により結合させ、俳人の主観が受動的に働いて、さまざまな素材が自然に結び合うのを許す場を提供するときに、大きな個性が生かされる。

国語A【解答】

受験校	受験番号	フリガナ	
		氏名	

/100

第1問 (配点50点)

	問一				
	1	2	3	4	5
解答	②	①	④	③	①
配点	2	2	2	2	2

	問二			問三	
	6	7	8	9	10
解答	①	②	⑤	③	②
配点	2	2	2	4	4

	問四	問五	問六	問七	問八
	11	12	13	14	15
解答	④	⑤	④	③	①
配点	4	5	5	6	6

第2問 (配点50点)

	問一			問二	
	16	17	18	19	20
解答	②	⑤	③	④	①
配点	2	2	2	2	2

	問三	問四	問五
	21	22	23
解答	⑤	②	①
配点	4	4	4

	問六	問七	問八
	24	25	26
解答	④	③	③
配点	5	5	6

	問九	問十
	27	28
解答	④	⑤
配点	6	6